

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：37104

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380908

研究課題名(和文) LTD話し合い学習法による高大接続教育の中核となる授業づくり

研究課題名(英文) Lesson Study Based on Learning Through Discussion in High School/University Connection

研究代表者

安永 悟 (Yasunaga, Satoru)

久留米大学・文学部・教授

研究者番号：60182341

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)： 高大接続教育の中核は、高校と大学とが、教育目的を共有し、その目的を達成するために同じ教育観を依拠とした授業づくりを展開することにある。この考えを前提に、本研究では「現場で活躍できる人材育成」を教育目的とし、協同学習の一技法であるLTD話し合い学習法を基盤とした授業モデルを構築し、高校と大学および専門学校で実践し、その成果を確認した。また、開発した授業モデルを含め、協同学習の理論と技法を中心に据えた小学校から大学の教員を対象とした「授業づくり研究会」を継続的に開催した。

研究成果の概要(英文)： The core of High School/University Connection is to share the educational purpose at high schools and universities and to design classes on the bases of the same educational philosophy to achieve this purpose. On the assumption of this idea, we aimed at human resources development in this study. We constructed a model of classes based on LTD, which is one of the techniques of Cooperative Learning. We practiced it at high schools, vocational schools and universities, and evaluated research results. In addition, we hold workshops about designing classes continuously for those teachers who focus on the theory and techniques of Cooperative Learning in their schools and universities.

研究分野：教育心理学

キーワード： LTD話し合い学習法 協同学習 授業づくり 教師教育 高大接続教育 初年次教育 アクティブラーニング

## 1. 研究開始当初の背景

本研究を計画した平成24年当時は、中教審において高大接続に関する議論が本格化してきた時期であった。当時は教育システムに関する議論が中心であり、具体的な教育の在り方や授業づくりについての議論はまだ深まっていなかった。中教審が平成24年に出した「質的転換答申」のなかでアクティブラーニング(AL)が明示され、現在の「一大ブーム」のきっかけとなったが、当時はALの概念整理も不十分であり、アクティブな授業をどのように展開すればいいのか、教育実践レベルにおいては手探りの状態であった。

そのなかにあつて筆者は、平成7年(1995年)から始めたLTD話し合い学習法(Learning Through Discussion; レイボーら, 1996)に関する一連の研究成果に鑑み(安永, 2012, 安永・須藤, 2014)、高大接続においては教育実践レベルでの接続が重要であるとの確信をえて、本研究を着想した。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は次の3点であった。

- (1) LTD話し合い学習法に基づき、読解力と対話力と文章作成能力を継続的かつ重層的に育成するLTD基盤型授業モデルを構築し、その有効性を高校と大学で検証する。
- (2) 開発した授業モデルに依拠した高大接続教育を実現するためには、協同学習の理論と技法を十分に理解した教師の育成が不可欠である。本研究では教師の授業実践力を高める研修を開発し、研修の機会を広く提供する。
- (3) 開発したLTD基盤型授業モデルに基づいて、高大接続教育の在り方について論考を深め、高大接続教育の具体化、実質化に向けての提言を行う。

## 3. 研究の方法

本研究を進めるにあたって、次の4点を中

心に研究を展開した。

(1) LTD基盤型授業モデルの構築と効果検証  
高大接続教育の中核となる授業モデルを構築するために、LTD話し合い学習法を基盤とした授業づくりを実践的に進めた。検討対象とした科目は大学や専門学校の初年次教育科目が中心であった(須藤・安永, 2014)。

### (2) LTD基盤型授業の高校での実践

構築したLTD基盤型授業を高校で展開し、高大接続教育の中核的な授業になりうるか、その可能性を検討した。導入を試みた科目は「国語科」「数学科」「理科」であった。

### (3) 教師向け研修会の実施

LTD基盤型授業に対する教師の経験知を高めるために、① 授業づくり研究会(協同教育フェスタを含む)、② 教員免許講習会、③ 個別の講演会・研修会などを開催した。これらの活動内容は安永悟研究室のホームページで確認できる。<http://yasunaga.me/wiki.cgi>

### (4) グループ学習の経験知に関する調査

高校生および大学生を対象に、過去の授業で経験したグループ学習について調査し、その実態と、生徒・学生に及ぼす影響について検討した(石山・安永, 2013; 松永, 2016)。

## 4. 研究成果

### (1) LTD基盤型授業モデルの構築と効果検証

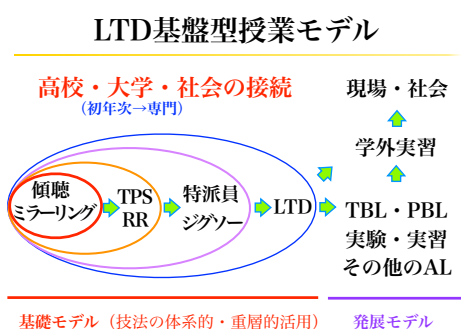
#### ① LTD基盤型授業モデルの構築

高大接続教育の中核を担うLTD基盤型授業モデルを開発することができた。その概念図をスライド1に示す。本研究で構成したモデルは、スライド1に示す「基礎モデル」にあたる。

この基礎モデルは、LTDの効果を高めるためには、基本的な話し合いのスキル(傾聴やミラーリング)や協同学習の基本技法(TPS シンク=ペア=シェア、RR ラウンドロビン、特派

員、ジグソー学習法)を体系的かつ重層的に活用することの重要性を示している。

この基礎モデルに基づき計画された授業例をスライド 2 に示す。これは大学の初年次教育科目である「教養演習 I」(1年生対象、前期2単位)に基礎モデルを適用したものである。



スライド 1

**授業例 「教養演習 I」の授業計画**

1-2講	協同学習の理論と技法	傾聴・ミラーリング TPS・RR
3-5講	授業の受け方、ノート	↓
6-8講	言語技術 (聴く・話す・読む)	特派員 ↓
9-11講	LTD話し合い学習法	ジグソー ↓
12-14講	言語技術 (書く)	LTD ↓
15講	ふり返り、まとめ	↓

スライド 2

**(2) LTD基盤型授業の高校での実践**

スライド2に示したLTD基盤型授業(基礎モデル)に期待される学習成果は、多様な側面から検討されている。例えば、LTD基盤型授業を展開することにより、協同を肯定する認識が高まり「批判的思考態度」も向上する(松永, 2016)。また、LTD基盤型授業は論理的な言語技術の育成に優れ、例えば質の高いエッセイやレポートを書く力を向上することなども示されている(安永・須藤, 2014)。

**③ LTD基盤型授業モデルの展開**

LTD基盤型授業モデルは大学の初年次教育で開発された。その実践から「基礎モデル」に沿った授業を展開すると、専門課程の授業や学外実習などの教育成果が高まることが知られている。

このLTD基盤型授業(基礎モデル)を大学の初年次教育ではなく、高校教育において展開すると、高大接続教育の協力的なツールとなる。その可能性を示す実践結果が、高校生を対象とした授業で得られている(安永・岡田, 準備中; 石山・古賀・安永, 2014)。

LTD基盤型授業の基礎モデルを高校で展開することで、グループ学習の質を高める具体的なスキルや、学習に対する基本的な態度を養い、主体性や能動性さらには協調性の高い高校生を育てることができる。大学では、このような高校生を受け入れ、LTD基盤型授業の発展モデルを展開することにより、大学教育の質保証が期待できる。

**(3) 教員向け研修会の実施**

昨今一大ブームとなっているアクティブラーニング(AL)型授業の成否は、偏に、指導にあたる教師の力量に依存する。

残念ながら、ALの指導にあたる現役教師の多くはAL型授業を体験したことがない。当然ながら、経験がないことは教えられない。関連する書籍を読んだだけでは、実践には堪えられない。関連する研修会に参加し、協同学習の理論や技法、協同学習の学習観や「協同の精神」を理解したうえで、実体験することが不可欠である。

そこで本研究活動の一環として、希望する教師に研修の場を提供してきた。本研究の期間中、下記の活動を行った。なお、活動内容の一部は安永悟のホームページで確認できる。

### ① 授業づくり研究会

本研究期間中（2013～15年度）「授業づくり研究会（協同教育フェスタを含む）」を18回開催した。この研究会では、参加者が協同学習の理論を理解し、協同学習の技法を実体験することなどを目的としている。

授業づくり研究会は土曜日の午後1時から5時までの4時間が基本であり、毎回、複数名の登壇者が協同学習を基盤とした授業実践とその成果について報告を行い、参加者全員で検討している。

授業づくり研究会には、毎回、九州を中心に平均50名程度の参加者があり、高等教育関係者が約6割、初等・中等教育関係者が約4割となっている。遠方からの参加者も多く、南は沖縄、北は北海道からの参加者もある。この数年間、看護教員の参加者が目立っていたが、15年度後半からは高校の教員の参加も増えてきた。

### ② 教員免許講習会

本研究で得られた上記「授業モデル」を基盤とした本格的な研修を提供するために、3日間連続の講習会を提供している。テーマは「協同学習による授業づくり」であり、児童・生徒の変化成長を保證する活動性の高い授業づくりを協同学習の観点から検討している。

LTD基盤型授業に準拠した本講習会に対する参加者の評価は極めて高い。

### ③ 個別の研修会・講演会

上記の「授業づくり研究会」や「教員免許講習会」は久留米大学御井キャンパスで定期的で開催しているが、これとは別に、小学校・中学校・高校・大学や看護学校さらには県や市などの各種団体からの要請に応じて、研修会や講演会を開催している。そこでは、本研究の成果に基づき「協同による活動性の高い授業づくり」について、体験的な理解ができるように工夫している。

### (4) グループ学習の経験知に関する調査

ここでは過去のグループ学習の経験について、高校生（石山・安永，2013）と大学生（松永，2016）を対象とした調査結果を紹介する。

#### ① 高校生に対する調査結果

(7) 経験頻度： 頻度の差はあるものの、全ての小学校と中学校でグループ学習が導入されている。また、同じ学校出身であっても経験頻度や評価が異なっており、グループ学習の活用については学校内にも温度差があると推測される。

(イ) 評価： 校種にかかわらず、グループ学習に対する評価は良好である。肯定的な理由として、小・中とも「学び合い」が最も多い。特に中学校では「学び合い」が高く評価されている。一方、小学生では「友人（例：友達ができた）」や「楽しさ」が高く評価される傾向にある。否定的評価として、小学校では「効率（例：一人でもできる。意味がなかった）」が多く、中学校は「私語」が主な原因としてあげられている。

(ウ) 自己の変化時期とその内容： グループ学習を通して変化成長を自覚した時期としては中学校が最も多く、それに高校が続いた。小学校は少なかった。中学校と答えた生徒は「思考・理解・集中」の変化を上げた割合が多く、高校と答えた生徒は「発言・参加」をあげた割合が多いことが特徴的である。

(エ) 高校（久留米市立南筑高校）の取組： ほとんどの生徒が高校の取組を肯定的に評価していた。多くの生徒が、協同学習に取り組む教師集団を高く評価しており、それに応じて生徒自身も努力したいという意味表明も見受けられた（例：先生方も努力してもらっているので、私たち生徒も勉強に今までよりも力を入れていきたいです）。

一方、高校の取組を評価しながらも、改善点を指摘した生徒が多くいた。その主な内容は、小・中学校における否定的評価の項目と

通じるものが多く、a)授業に関係ない内容を話すこと（私語）、b)協同学習の効果を疑問視しているもの（効率）、c)全員が積極的に参加できる環境のさらなる工夫をもとめるもの（不公平）などの意見がみられた。また、高校の実態を指摘するものとして、d)他の教科への導入希望、e)協同学習の時間の増加希望、f)個人による思考時間の充実希望などの意見も見られた。

## ② 大学生に対する調査結果

(ア)批判的思考態度尺度を手がかりに分析したところ「探究心」と「客観性」において、グループ授業経験あり群が、グループ授業経験なし群よりも得点が高いことが確認された。(イ) ジョンソンらが述べる協同学習の基本要素のうち「肯定的相互依存」を意識したグループ学習を体験することにより、批判的思考態度が改善する可能性が示された。

これらの結果は、伊勢田(2011)が提唱している思いやりの原理と協調の原理で説明できる。つまり、対話が成立するためには聞き手と話し手のそれぞれに、協力的な態度である思いやりの原理と協調の原理が求められる。そこでは、根拠のない主張をすることや、権威のある相手の意見や自分の意に沿う意見を吟味せずに受け入れてしまうことなどが非協力的な態度となる。協同学習で一人ひとりが自らの考えを持ってグループ活動に参加し、互いの理解を深めるために真剣に話し合うことは、伊勢田のいう思いやりの原理や協調の原理が保障された状態であったと推察される。以上より、大学生を対象とした調査結果は、協同的なグループ活動の経験による差が反映したものと考えられる。

### <引用文献>

- ①伊勢田 哲治 2011 良き市民を目指す批判的思考教育、楠見孝ら(編) 批判的思考力を育む、有斐閣、pp. 169-177

- ②松永有紀子 2016 協同学習が批判的思考態度の育成に及ぼす効果 久留米大学大学院心理学研究科 平成27年度 修士論文(指導・安永悟)
- ③レイボーら 1996 討論で学習を深めるには:LTD話し合い学習法 丸野俊一・安永悟(訳) ナカニシヤ出版
- ③安永悟 2012 活動性を高める授業づくり、医学書院

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 4 件)

- ①藤田哲也・市川伸一・安永悟、学習者の活動性を高め、理解を深める協同学習-“教えて考える授業”と“LTD授業”の対話-(準備委員会企画シンポジウム)、教育心理学年報、査読無、2014、pp. 199-204.
- ②石丸文敏・安永悟、知的障害特別支援学級における協同学習の試み-小学校算数科「あまりのあるわり算」の実践-、協同と教育、査読有、2015、11、pp. 43-53.
- ③須藤文・安永悟、LTD話し合い学習法を活用した授業づくり:看護学生を対象とした言語技術教育、初年次教育学会誌、査読有、2014、6、1、pp. 78-85.
- ④安永悟、協同による活動性の高い授業づくり、日本学校心理士会年報、査読有、2014、6、pp. 47-57.

[学会発表](計 7 件)

- ①石丸文敏・安永悟、知的障害を伴う広汎性発達障害児に対する協同学習の試み、日本協同教育学会第11回大会、2014年10月25日、創価大学(八王子市)
- ②石山信幸・安永悟、協同学習導入に対する高校生の認識と過去経験との関係:高校1年生に対する質問紙調査から、日本協同教育学会第10回大会、2013年11月30日、札幌大学(札幌市)
- ③石山信幸・古賀渉・安永悟、協同学習を中核とした高校数学の授業改善:授業進度の

加速と学力保障、日本協同教育学会第11回大会、2014年10月25日、創価大学（八王子市）

- ④石山信幸・宮崎小百合・田下寛崇・安永悟、高校数学における協同学習を活用した授業改善：習熟度と少人数を活かす授業をめざして、日本リメディアル教育学会九州沖縄支部大会、2014年12月13日、久留米大学（久留米市）
- ⑤木村美奈子・二摩修司・安永悟、主体的学び活動を見える化するeポートフォリオデザイン：質保証のための分析・評価 日本協同教育学会第11回大会、2014年10月25日、創価大学（八王子市）
- ⑥須藤文・安永悟、LTD過程プランに基づくライティング指導：小学校6年生「国語」における随筆作成 日本協同教育学会第10回大会、2013年11月30日、札幌大学（札幌市）
- ⑦安永悟・須藤文・松永有紀子・徳田智代、LTDを基盤とした対話中心授業モデルの検討：批判的思考の育成を手がかりとして、初年次教育学会第7回大会、2013年9月13日、手塚山大学（奈良市）

〔図書〕（計 5 件）

- ① Satoru Yasunaga, Springer, Designing Highly Active Classes through Cooperation: Toward Classes that Bring About Perceptible Change and Growth, In Kayo Matsushita (Ed.) Deep Active-Learning: Towards Deepening Student Learning in Undergraduate Education, 2016 (in preparation)
- ② 安永悟・岡田範子、明治書店、LTD 話し合い学習法の実践、杉江修治（編著）協同学習が創るアクティブラーニング、2016（予定）200
- ③ 安永悟、東信堂、協同学習による授業デザイン：構造化を意識して、安永悟・他（編著）、アクティブラーニングの技法・授業デザイン、2016、pp. 3-23.
- ④ 安永悟、勁草書房、協同による活動性の高い授業づくり -深い変化成長を実感できる授業づくりをめざして-、松下佳代（編著）ディープ・アクティブラーニング -大学授業を深化させるために-、2014、pp. 113-139

- ⑤ 安永悟・須藤文、ナカニシヤ出版、LTD話し合い学習法、2014、180

〔産業財産権〕  
○出願状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

安永悟研究室  
<http://yasunaga.me/wiki.cgi>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

安永悟 (YASUNAGA, Satoru)  
久留米大学・文学部・教授  
研究者番号： 60182341

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：